日本ビルマ文化協会報
（臨時二号）

ビルマの現状

協会特別会員
大阪外国語大学助教授　大野　徹

ビルマ

全国至そところにパゴダのある国、竹山道雄の名作「ビルマの竪琴」の舞台となった国、そして前国連事務総長ウ・タントの生れた国、ビルマは美しい自然に恵まれた、敬虔な仏教徒の住む国である。

国民と生活

民族

ビルマの人口は二八、八七四、〇〇〇人（一九七二年一月現在）であるが、この中にはたくさんの少数民族が含まれている。ビルマ国民は、言葉の上では、(1)チベット・ビルマ語族、(2)タイ・シナ語族、(3)モン・クメール語族の三つに分けられる。チベット・ビルマ語族は九～一〇世紀ごろ中央アジア、チベット方面から移動してきた人達で、ビルマ族、カチン族、チン族、ナーガ族、リース族などから成っている。タイ・シナ語族は一三～一四世紀ごろ中国の雲南地方から南下して来た人達で、その中にはシャン族やカレン族が含まれる。モン・クメール語族は一番古くからビルマに定着していた人達で、モン族、パラウン族、ワ族などから成っている。全人口のおよそ五分の四はビルマ族でイラワジ川流域を中心とした平野部に住んでおり、ビルマ族以外の少数民族はたいてい周辺の山地に住んでいる。これを居住地別にみると、ビルマ本州（平野部）二、四〇〇万人、シャン州二八五万人、カチン州七二万人、カヤー州一二万人、コートゥーレー州八三万人、チン特別区三七万人となる。ビルマにはこのほか、イギリスの植民地時代に新しく住みついたインド人五〇万人と華僑三五万人とがいる。

宗教

ビルマは典型的な仏教国で、精霊を崇拝している山地民やごくわずかな比率を占めるキリスト教徒、回教徒、ヒンズー教徒などを除くと、残りはすべて仏教徒だと言ってよい。事実、都市では人口の八三%、村落では九五%までが仏教徒である。ビルマの仏教は、セイロンやタイと同じように南伝上座部仏教で戒律が厳しい。それにビルマ人の間では、今でも男子は一生に一度仏門に入って修業するのが社会的な仕来りになっている。ただし期間は一定していない。数ヵ月、数年といった本格的な修業生活から、一ヵ月、一週間、中には二十四時間だけという短期のものまで様々である。地方へ行くとどの村にもたいていパゴダとならんでポンヂー・チャウン（僧院）がある。ポンヂー・チャウンは、ビルマ独立前には小学校としての役割もはたした。子供たちはそこでお経を習い文字を覚えた。そのためビルマの識字率は六六%と東南アジア諸国の中できわだって高い。一九六六年からは文盲一掃運動（ア・トンロン）が全国的に展開されているので、やがて文盲がいなくなる日も訪れるものと期待されている。

教育

学校教育はイギリスの植民地時代からあったが、教育に本格的に力が入れられるようになったのは一九六四年に新しい教育制度が施行されてからである。現在、小学校の数は全国で一六、六〇〇、中学校は一、一〇〇、高校五六〇、大学一九で、生徒数も小・中・高校生四〇〇万人、大学生四五、〇〇〇人とふえている。一九七五年からは小学校の義務教育化も実施の予定である。

衣食住

ビルマの人家は、地方では二メートルぐらいの高床式が原則で、出入りには階段が使われる。屋根はカヤまたはニッパ・ヤシの葉で葺き、壁には細く裂いた竹を縦、横に編んだものが使われている。家のまわりは垣根で囲われ、バナナの木が植えてあったり野菜が作られていたりする。

ビルマ人の主食は米である。水気の少ないパサパサの状態に炊いたごはんを右手の親指、人差指、中指の三本でおかずと混ぜ合わせ、巧みに口の中に放り込む。まれにさじやフォークを使うことはあるが、箸は使わない。食事は、一般に一日二回である。おかずにはカレーや唐がらし、生の玉ねぎなど香辛料をよく使う。特にンガピとよばれるビルマ独特のおかずは、どの家庭にもなくてはならないものの一つである。ンガピというのは、魚や小えびの生肉を日に干し塩と混ぜてすり砕いた後、壺の中に入れて三～四ヵ月間漬けておくとできるミソ状の食べ物のことである。

ビルマ人は男も女もロンヂーとよばれるスカートのようなものをはく。男性用のロンヂーをパソー、女性用のをタメ・インとよぶこともある。ロンヂーは腰からくるぶしまでの長さがあり、腰のところで布をしぼって内側にねじ込む。ベルトは使わない。上半身にはエインヂーとよばれる長そでの上着を着る。都会には靴をはく人もいるが、たいていの人はパナッとよばれるゴムぞうりをはいている。帽子はふだんはかぶらないが、正装の時にはガウンバウンという帽子をかぶる。なお女性や子供は、タナッカーとよばれる植物の汁をよく顔や腕に塗って化粧している。

姓名

ビルマ人の名前には姓がない。名前は生れた曜日によってつけられるから、名前をみればその人の生れた曜日がわかる。男の場合少年時代にはマウン、青年時代にはコー、壮年以上になるとウーという称号を名前の前につけてよぶ。女の場合には若い人にはマ、中年以上の人にはドーという称号をつける。

祝祭日

ビルマの祝日には、独立記念日（一月四日）、連邦記念日（二月

発行所
日本ビルマ文化協会
大阪市南区長堀橋筋2-28
電 06-213-5858
発行兼編集人
小谷隆英・保科賢一

特別頒布
ビルマ地図（250円）
ビルマ語会話集（300円）
〒55円
申込先
大阪市南区長堀橋筋2-28
日本ビルマ文化協会
振替口座大阪310039
取引銀行
三和銀行日本一支店

一二日、農民の日（三月二日）、殉難者の日（七月一九日）、国民勝利の日（ビルマ暦八月黒分一〇日）、クリスマス（一二月二五日）、デーワリー日（ヒンズー教徒の祭日）、バッグリーイッ日（回教徒の祭日）などがあり、いずれも休日になる。このほか、ダヂャン祭日（正月。ビルマ暦一月黒分一～三日）、ガソン祭（釈尊降誕日。ビルマ暦二月満月の日）、ワーゾウ祭日（安居始め。ビルマ暦四月の満月の日）、ダディンヂュッ祭日（安居明け。ビルマ暦七月の満月の日）、ダザウンダイン灯祭（ビルマ暦八月の満月の日）、ダバウン祭日（ビルマ暦一二月の満月の日）といった仏教徒関係の祭日がある。この内ダヂャン祭日というのはビルマ暦の正月のことで、この日から三日間大人も子供も男も女もみんなお互いに水をかけ合って祝うので一名〝水祭り〟ともいう。ダディンヂュッ祭日には町でも村でもパゴダや家々に灯を灯して飾ることから、〝灯祭り〟ともよばれる。ワーゾウ祭日（一名〝花祭り〟）から灯祭りまでの三ヵ月間は仏教徒にとっての持戒期間で、結婚だとか転宅といった大きな移動は行なわれない。

国土と自然

・地理

ビルマは、東側でタイとラオス、北側で中国、西側ではインドとバングラデシュの五ヵ国と境を接し、南はベンガル湾に面している。地勢は北高南低で、北部と東西の三方が山地、その中間が平地となっている。国土は地形と気候の関係で、アラカン海岸（南西部）、テナセリム海岸（南東部）、シャン高原（東部）、カチン山地（北部）、ソーガ・チン丘陵（西部、北西部）、中部乾燥地帯（イラワジ川中流域）、デルタ地帯（イラワジ川下流域）の七つに分けられる。

・山岳

高山としては、カチン山地（西北国境）のカーカールボ・ラージー（一九、二九六フィート）、ガムラン・ラージー（一九、一四二フィート）、ナーガ丘陵のサラメティー山（一二、五五三フィート）、チン丘陵のビクトリア山（一〇、〇一八フィート）などがある。シャン高原は海抜平均三、〇〇〇フィート前後の高原で、その南のテナセリウム山脈を経てマレー半島へと連なっている。イラワジ川とシッタウン川の中間にあるペグー山脈は鳥の宝庫として有名だが、二、〇〇〇フィート足らずの低山である。

河川・湖沼

主な河川には、ビルマ、インド、中国三国の国境付近に源を発し国土を北から南へと縦断しているイラワジ川（大金沙江）、チベット高原に源を発し雲南を経てシャン高原、カヤー州、コートゥーレー州を流れた後マルタバン湾に注ぐサルウィン川（怒江）、シャン高原に源を発しペグー山脈の東側を通ってラングーンとモールメンの間でマルタバン湾に注ぐ急流で名高いシッタウン川、西北国境のクーモン山系に源を発し中部ビルマのパコック付近でイラワジ川に合流しているチンドゥイン川などがある。

主な湖沼としては、ミッチーナー県内のインドーヂー湖、カター県内のインドーヂー湖、シャン州南部のインレー湖などがある。中部ビルマのメイティーラー湖は灌漑用に作られた人工湖である。ラングーンのインヤーカン、カンドーヂの二つも人造湖である。

気候

中部と南部が熱帯、北部は亜熱帯であるため気候も南と北ではかなり違う。ビルマの季節は、平地では雨季、涼季、暑季の三つに分けることができる。雨季は毎年六月から一〇月ごろまで続くが、この期間には南西季節風によってインド洋からもたらされた雨雲が多量の雨を降らせる。年間降雨量は中部乾燥地帯では八〇〇ミリ前後にすぎないが、デルタ地帯では二、五〇〇ミリ、アラカン、テナセリム両海岸になると四、〇〇〇～五、〇〇〇ミリという数値を示す。雨季が明けると一一月、一二月、一月と涼季が続く。この期間には、内陸からの北西季節風の影響で降雨量がほとんどゼロになる。ラングーンでは最低気温が六〇℉を割ることも珍しくない。気温は二月中旬ごろから急激に上昇し始め、三月、四月、五月と猛烈な暑さが続く。この暑季には、中部乾燥地帯で日中の最高気温が一〇八℉、一〇九℉という高さを示すことが多い。この間も雨はほとんど降らない。

動植物

ビルマには、インド象、一角さい、二角さい、野牛、虎、豹、熊などの大型野獣から、猿、鹿、てん、かわうそ、りす、むささび、こうもりなどの小動物に至るまで様々な動物が棲息している。珍獣としては、テナセリム地方のばく、カチン州内の森林にすくパンダ、ボウパー山、ペグー山脈、乾燥地帯などで見られるセンザンコウなどが有名。アラカン海岸やメルギー群島ではジュゴン（人魚）がとれたこともある。鳥は、ビルマには約一、〇〇〇種類いる。この内二五〇種は渡り鳥である。ビルマの代表的な鳥はクジャクで、全土にいる。ビルマには爬虫類も多い。中でも、夜大きな声で鳴くトッケー、体の色を変える木登りトカゲ、体長一～二メートルに達する大トカゲなど、トカゲの種類が多い。毒蛇の代表的なものは、コブラ（めがね蛇）、体長が四メートル近くにもなるジャイアント・コブラ、噛まれたら血清を注射しないと命が助からない猛毒のバイパーなどである。全身が鮮かな緑色をしたグリーン・スネークという細長い蛇もいる。

植物は全土で七、〇〇〇種ほど知られているが、その内の一、三〇〇種は樹木、四〇〇種が草である。つる性の植物は九〇〇種、竹だけでも九〇種ある。

資源と産業

農業

ビルマは典型的な農業国である。労働総人口の七〇％近くが農業に従事し、輸出総額の六〇％が農産物で占められている。耕地総面積は二、二〇〇万エーカーだが、その五五％にあたる一、二〇〇万エーカーが水田である。主な農産物には年八〇〇万トンを産出する米を筆頭に、甘蔗、落花生、豆類、ゴマ、棉花、ジュート、などがある。地形と気候の関係から米作はその八割までがイラワジ川下流のデルタ地帯で行なわれ、ゴマ、落花生、棉花、豆類などの畑作物は雨量の少ない中部乾燥地帯で栽培されている。

林業

ビルマは国土の五七・三％が森林であるが、北部は亜熱帯林、南部はモンスーン林、熱帯常緑林になっている。ビルマ産の有用植物には、チーク、ピンカドー（鉄木）、バダウ（胥菴木）、ピンマ（大花さるすべり）イン（ラワン）などの硬質材、サンダグー（白檀）、アチョー（伽羅）、チイッヂャボウ（肉桂）、パヨウ（樟）、シャー（阿仙薬）などの香料植物、ココ椰子、砂糖椰子、籐、竹などがある。特にチークはビルマの特産品で、世界市場の八五％をビルマが供給している。またテナセリム地方では年一三、〇

〇〇トンのゴムが生産されている。

鉱業

ビルマの鉱産物には、石油と亜鉛、鉛、銀、銅、錫、アンチモン、タングステンなどの非鉄金属とがある。石油はイラワジ川中流域のイェーナンヂャウン、チャウを中心に年二億ガロンが採油されている。最近は日本の協力で海底油田の探索も行なわれている。鉛、亜鉛、銅、銀はシャン州北部（ボードウィン鉱山）で、タングステンと錫はテナセリム地方で採掘されている。カヤー州南部のモーチー鉱山も再開発の見込みである。なお北部ビルマのモーゴウ、モーガウンは、ルビー、サファイヤ、ヒスイなどの産地として名高い。ビルマの鉱業はすべて国営で、鉱山省直属のいくつかの公社によって運営されている。

工業

ビルマでは工業も国営である。工業省の配下には、電力、衣料、食品、化学、陶磁器、製薬、製紙など一四の公社が設置され、国営工場一、五〇〇が稼動している。主な製品には砂糖、塩、タバコ、布地、レンガ、セメント、化学肥料などがある。

貿易

ビルマの主な輸出商品は、米、豆類、綿花、ジュート、ゴムなどの農産物、チーク材、各種の鉱物などであり、輸入商品は機械、金属製品、繊維製品などである。原材料を輸出し完成消費材を輸入するのがビルマ貿易の基本的な型になっている。輸出商品の花形は米で、一九五〇年代には輸出総額の七〇％～八〇％を占めていた。主な取引相手は、輸出面でインドネシア、インド、セイロン、シンガポールなどビルマ米の買付け国、輸入面では日本、インド、イギリス、中国などの国々がある。

日本とビルマの関係

日本は、第二次世界大戦当時イギリスの植民地であったビルマを占領し、一九四二年から四五年まで三年間にわたってビルマを統治したことがある。一九四八年にビルマが独立すると日本はビルマとの間に賠償協定を結んで、総額二億ドルの賠償を一九五五年から一〇ヵ年にわたって支払い、一九六五年からはさらに一億四千万ドルの経済協力を行なっている。出力八万四千キロ（電力庁による発電総量の四二％）をほこるバルーチャウンの水力発電所や自動車工場、ラジオ工場、農機具工場などはこの賠償、経済協力によるものである。貿易の面でも日本は、一九五九年以来ビルマの輸入相手国としては常に首位に立っている。

都市と交通

都市

ビルマでは、ラングーン、マンダレー、モールメン、パテインなどいくつかの主要都市を除けば人口が一〇万を越えるところないが、中央官庁の出先機関が設置されておりその地方の経済、産業、行政の中心となっているような地方都市は四十七ある。いずれも県庁の所在地である。

道路

ビルマには自動車の通行可能な道路が約一三、〇〇〇マイルある。この内ラングーンから北へ向う幹線道路には、イラワジ川沿いにプローム、マグウー、ミンヂャン、マンダレーへとのびる道路（五五二マイル）と鉄道沿いにペグー、タウンヂー、メイティーラー、マンダレーへとのびる道路（四三〇マイル）がある。また上ビルマの中心地マンダレーからは、シャン州のノーラショー、ラーショー、バモーを通ってカチン州のミッチーナーに達する道路（四八七マイル）がある。

鉄道

太平洋戦争の戦災でかなり破壊されたがその後復旧され、現在では総距離二、六〇〇マイルになっている。ラングーンを基点とする幹線には、マンダレー線（三八五マイル）、プローム線（一六〇マイル）、モールメン線（一七〇マイル）などがある。またマンダレーからは、ミッチーナー線（三三八マイル）、モンユワー線（七〇マイル）、ラーショー線（一七五マイル）などが設けられている。そのほか、ピンマーナー、タージーを分岐点とする支線が何本かある。一九六七年からはラングーン・マンダレー間で、六八年からはラングーン・プローム間、ラングーン・モールメン間で急行列車が走るようになった。ビルマの鉄道はすべて国営で、運輸省直属のビルマ鉄道公社が運営している。

水運

ビルマでは沿岸交通だけでなく、イラワジ、チンドウィン、サルウィン、カラダンなど河川を利用した交通網も発達している。主な航路には、イラワジ川のラングーン・プローム・マンダレー間（六〇〇マイル）、マンダレー・バモー間（二七七マイル）、チンドウィン川のミンヂャン・モンユワー・カムティー間（五一三マイル）、サルウィン川のモールメン・パアン間（三三マイル）などがある。またラングーンからピャーポン、パテイン、ミャウンミャなどイラワジ川下流のデルタ地帯に向う航路もある。アラカン地方ではシットウェーを中心とした沿岸航路が発達している。ビルマの水運は、河川が国内水運公社、沿岸が沿岸輸送公社、遠洋はファイブスター船舶公社という三つに、運輸省直属の公社によって運営されている。

航空

一九五七年に開設されたラングーン空港（ミンガラードン）を中心に、マンダレー、モールメン、プローム、シットウェー、タウンヂー、ミッチーナーなど国内四十三の主要都市との間に定期航路が開設されている。また、ホンコン、バンコク、チッタゴン、カルカッタなど東南アジア諸国との間にも定期便が就航している。ビルマの航空業務はすべて運輸省配下のビルマ航空公社が行なっており、ボーイング七二七、バイカウント、フォーカーフレンドシップ、ダコタなど一七機が使用されている。

通信

ビルマの郵便・電信業務は運輸通信省配下の郵便電信公社の受持ちである。戦災で壊滅していた通信網は現在ではほとんど回復しており、国内二八二局だけでなく大阪、コロンボ、カルカッタ、バンコク、ホンコンなど諸外国との通信も行なわれている。電話はビルマ全土に二六、〇〇〇台あり、その内一、七〇〇台がラングーンに設置されている。ラングーンの電話は一九五八年に電磁式からダイヤル式に変った。日本、アメリカ、イギリス、タイ、インド、パキスタン、シンガポールなどへは国際電話がかけられる。郵便局は全土に九三六局あり、普通便、書留便、小包便、為替などを取扱っている。また船便、航空便、書留便などによる外国郵便の取扱いも行なわれている。

歴史と政治

歴史と政治

ビルマ最初の統一国家パガンがアニルッダ王によって建設されたのは一一世紀の中頃である。ビルマ人は南部に住むモン人から仏教を受容し文字を学びとった。今もパガンの遺跡に残る数多くのパゴダや寺院は、当時の文化の高さを示している。パガンは一三世紀の後半に元の攻撃を受けて亡んだ。

その後のビルマではシャン族、ビルマ族、モン族の葛藤が続き、いくつかの小王国が現われては消え去った。

史上二度目の国土統一がタビンシュエティー、バインナウン両王によってなされたのは一六世紀になってからである。海に面した首都のペグーは諸外国との交易で盛えた。このタウングー王朝はイラワジ川デルタにすむモン族の蜂起で一七世紀に倒れた。次に姿を現わしたのがビルマ史上最後のコンバウン王朝である。一七五二年にシュエボー出身のアラウンパヤーによって樹立されたこの王朝は、アユタヤ、アッサムなど周辺の国々を征服して強大な王国を築き上げたが、一八二四年、一八五二年、一八八五と三回にわたイギリスとの戦に敗れて崩壊した。ビルマは、こうして一八八六年にイギリスの植民地となってしまった。

イギリスのビルマ支配は一九四八年まで続いたが、太平洋戦争中には三年間にわたる日本軍に占領されていた。第二次大戦終了後アウンサン将軍を指揮者とする反ファシスト人民自由連盟がイギリスに対してビルマの独立を要求、ビルマは一九四八年一月四日に独立した。

独立後のビルマは連邦制国家として議会民主主義制度の下に運営されてきたが、ビルマ共産党やカレン族、カチン族、シャン族など少数民族の反政府組織が各地で活動を続けたため長い間治安が安定しなかった。それにアウンサン将軍が暗殺された後、ウー・ヌ首相によって率いられてきた与党の反ファシスト人民自由連盟が一九五八年に分裂、政情が混乱した。一九六二年三月、ネーウィン将軍の率いるビルマ国軍がクーデターを起して政権を掌握した。ネーウィン将軍を議長とする革命評議会は憲法を停止し国会を解散してビルマ式社会主義政策をおし進めた。農民と労働者を基盤とする社会主義国家の建設、社会主義経済制度の確立、これが革命評議会のめざす目標である。

これからの課題

一九七二年三月、ネーウィン将軍をはじめとする革命評議会員、閣僚など二一名の高級将校が軍籍を離れて民間人になった。軍政の廃止を目指す第一歩である。四月には新憲法第一次原案が発表され、一九七三年には公布の見通し。同時に民政移管も実施される予定である。一院制の人民議会設置、大統領、首相の選出、住民の直接選挙による人民評議会の設置も行なわれる予定である。しかし、反政府組織は残存しているし、言語や習慣の違う諸民族の統合問題は今後の課題であろう。極度に悪化している経済の立て直しも重要課題の一つである。

資料と数字

国名　ビルマ社会主義共和国連邦（予定）。
首都　ラングーン。
位置　東南アジア。
北緯二八度二九分～九度五八分、東経一〇一度一〇分～九二度一一分
面積　二六一、七五七平方マイル（六七七、九二四平方キロ）
地理的特徴。
主要河川　イラワジ、サルウィン、シッタウン、チンドゥイン、
主な山　カカールボ・ラージ（一九、二九六フィート）
ガムラン・ラージー（一九、一四二フィート）
タタ・ラージー（一七、〇七一フィート）
サラマティー（一二、五五三フィート）
ビクトリア（一〇、〇一八フィート）
人口　二八、八七四、〇〇〇（一九七二年推定）
国語　ビルマ語。
宗教　仏教。ほかにキリスト教、回教、ヒンズー教、精霊崇拝。
政体　連邦共和制（予定）。
元首。大統領（予定）
経済　農産物　米、甘蔗、落花生、豆、ゴマ、綿花。
林産物　チーク。
鉱産物　石油。

主要都市紹介

ラングーン（ヤンゴン）
人口一九三万、首都、市内には東西の大通りが五本、南北の通りは無数にあり西から東に向へて番号順に呼ばれる。面積一八五平方哩。

。シュエダゴン・パゴダ
高さ三二六呎、一四二〇呎に及ぶ基壇の周囲は六四個の小パゴダ群がとり囲んでいる。二五〇〇年前インドより持ち帰った仏陀の聖髪八本がここに祀ってあると云われている。

。スーレー・パゴダ
高さ一五七呎、市中目抜通りにあるのでよく目につき、二二五〇年前の建立で仏陀の聖髪を祀る。

。ガバーエー・パゴダ
七年前建立、ラ市より北方七哩にある。

マンダレー
人口三二万、上ビルマ中心地、市の西北部にマンダレー王城跡として四角な城壁と濠が残っている。

。マンダレー・丘
マ市の北部にあり高さ九五四呎、石造りの長い階段を登ると丘の上に沢山の寺院があり、頂上より東西南北整然としたマ市とその西を流れるイラワジ河が見える。
丘のふもとに大理石で製られた仏塔群も有名、王城の南西に時計台のあるゼーチョー市場がある。

パガン
一一世紀より二百年に亘って栄えたパガン王朝の遺跡として当時建立された寺院、パゴダが無数にあり、各種の形態、構造、壁画、中に安置されている聖物、等々あり絶対見落すことの出来ない研究、観光の地域です。

モールメイン
人口一七万、ビルマ第三の都市、サルウイン河の河口に存在し港として栄えている。

ペグー
ラングーン市北東五〇哩、「寝釈迦」で有名。

タウングー（トングー）
人口三万、シッタン河に面し、ラ市の北方一六〇哩。

バテイン（バセイン）
人口一二万、イラワジ河の支流バセイン河に面し、港として（一万屯級船舶遡行可能）栄えている。

シットゥエー（アキャブ）
人口一二万、カラダン河口に位置し、良港。

マグエー
人口一万三千。

サガイン
人口一万六千、イラワシ河を隔ててマンダレーの対岸。
マンダレーより歴史的に古い王都で、市街地北部の丘の上に点在する仏塔寺院群は有名な仏教の修業地である。

メイティーラー（メイクテーラ）
人口二万六千、街の西側に湖がある。

パコックー

タウンヂー

ミッチーナー（ミートキーナ）